山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第6号（1995.3）

# 栽培活動をめぐる間接教育

## ―― アサガオがM児に呼びかけたこと ――

桑原 昭徳*

Indirect Education through Growing Morning Glory

Akinori KUWAHARA*

（1994.11.21受理）

キーワード：間接指導、アサガオ、観察、

## 1．はじめに

1991年5月、当時3歳8か月の保育園児であったM児と筆者との散歩は、1994年11月現在においても続行している。散歩活動については、すでにこれまでにも論述してきた。(1) 1994年の4月、M児は小学校に入学したが、この夏は、散歩に加えて、1鉢のアサガオをめぐってもM児とつき合うことになった。M児とアサガオと筆者との三者が初めて出会うことになった契機は次のとおりである。

夏休み開始の頃、筆者は、M児宅の玄関前に1鉢のアサガオが置かれたことに気付いた。それを見て、小学校1年生の生活科授業の延長線上にあるアサガオだと考えたのであった。

夏休み開始後6日後の7月26日のことであった。この日、台風は過ぎ去ったものの、名残りの雲が速く流れ、小雨も降っている。午前10時前、筆者が車で外出するために自宅の玄関先に出た時のことであった。同じように玄関から出てきたM児が「アサガオが咲いとる！」と大きな声で叫んでいる。筆者は、さっそく声の主とアサガオの鉢の近くに行ってみた。M児のアサガオは玄関の入り口のテラスの中央、それもドアの真ん前で、玄関を出入りする人が必ずぶつかる位置においてある。

K（筆者、以下の会話部分ではKと示す）「いくつ咲いとる？」

M児（同じように会話部分ではMと示す）は、アサガオの花を指さしながら、1つずつ声を出しながら数えて「4つじゃ」と教えてくれた。

ついでに筆者は「あした咲くぶん、どれか分かる」と尋ねてみた。つまり、翌日咲くアサガオの膨らんだ蕾の数を尋ねたつもりであった。M児には、このことが理解できないようであった。そこで、ちょうどコウモリ傘をたたんで巻きつけた状態の膨らんだ蕾を指さして、「これよ」と教えた。M児は知らなかったらしく「ふうん」と応じた。

これが、1994年の夏、アサガオとM児と筆者との三者が同時に出会った最初の場面であった。

---

* 山口大学教育学部幼児教育

小学校１年生の場合、従来の理科では、夏休みの観察学習の一環として、家庭でアサガオを世話して育てること、そして咲いた花の個数を調べ、気付きを文章化すること等が、主要な内容であった。だから生活科が導入された現在でも、学校から持ち帰った植木鉢のアサガオであれば、アサガオの花の個数調べが夏休みの課題であろうと予想して、M児に対して「忘れんうちに、紙に書いとかんといけんね」と言って、その場は終わりにするつもりであった。しかし、M児が教えてくれたところによれば、そのような紙はないということであった。そこで、筆者は「おじちゃんが帰ってから一緒に作ろう」と約束をして外出することになった。

アサガオの花の個数を調べて記入するための表づくりの見本になればと考え、かつて筆者の長男が小学校１年生の夏に作成したアサガオの記録を捜した。何かの参考になればと考え、残しておいたものである。約束どおり拙宅にやってきたM児に、15年前の「あさがおのはなのかず」の表を見せる。そして「こんなのを作ろうか」と呼びかけてみる。M児も、自分のものが欲しいようすであった。

大きな机を前にM児と筆者が並んで座り、さっそく表の作成に取りかかった。用紙はＢ４大の画用紙である。縦横各２センチの正方形が縦１列に１０個並ぶように縦の欄をとったあと、その下に月と日を記入する欄２つを取る。そして横に１日につき１行の割合で、１日に咲いたアサガオの個数を記入するつもりで記入欄を作っていった。１枚の画用紙で１８行の欄ができあがった。

次に、アサガオの花に似せた形を、縦10個、横18列、合計 180個ほど描かなくてはならない。アサガオの花の輪郭は丸（○）で表わし、花を上から見たときの漏斗形の感じを出すためには丸の中に星形（☆）を描かなくてはらない。

あれこれ試行錯誤をくりかえしたすえに、アサガオの外輪にあたる輪郭の丸の部分はマジック・インキのキャップで、ちょうど正方形の中に入ることがわかった。内部の星形は、居合わせた妻がジャガイモで彫ることにした。M児が見守るそばで筆者が外部の輪郭の部分１８０個を押した。そのうちに、ジャガイモの星形はできあがった。ジャガイモのスタンプは、柔らかくて不安定であったが、どうにか中央部分に押すことができた。その間中、M児は私のそばで作業を見守っていたのであった。

物差しで計測して記入欄を作成する作業は今のM児にはできないが、スタンプ押しの作業はM児にもできそうな仕事であったので、途中でM児と交代しようとしたが、表の作成は予想以上に難しい作業となった。

画用紙１枚分の記入用紙ができあがって、さっそく、この日の花の数を記入することになった。筆者は「今日は何日かいね」と尋ねてみる。M児は「７月26日」と答えたあと、記入欄の第１行目に「７」と「２６」の数字を「クーピー」で書く。M児のもっているクーピーは細くて持ちにくく、書きづらい様子であり、書かれた字は色も薄い。

つぎに、色を塗ろうとしたのであるが、アサガオの花の色が、色鉛筆の色でいえば何色にあたるものか、すぐには判明しない。アサガオの花の色を確かめるために、M児宅の玄関前に置いてあるアサガオの鉢をふたりで一緒に見に行く。この日、アサガオは、青と紫の花が、それぞれ２個ずつ咲いていた。ふたたび拙宅に引き返して、青色と紫色のアサガオの花の形が２個ずつ、縦に合計４個ほど記入されることになった。

そのほかにM児は「アサガオのはなのかず」という題字も書いた。

以上が、M児とアサガオと筆者の三者が初めて出会い、その日のうちに「あさがおのは

なのかず」という表を作り、記入するまでの様子である。

## 2．7月30日（第2回目）の記録から

表を作成してから4日の間、筆者はM児と出会うことができなかった。しかし、7月30日の早朝には、M児と筆者との間にはアサガオをめぐって次のようなかかわりがあった。以下に、その日の記録をそのまま収録する。この記録をもとに、まずは初期のころのアサガオがM児に呼びかけた事柄について検討したいのである。文中の①②などの丸付き文字は、後の検討のためのものである。

■記録1

7月30日（土曜）朝6時20分、筆者が研究室へ出かけるところで、M児とヒロ君（小5の兄）がラジオ体操に出かける場面に出くわす。

M児が、アサガオがたくさん咲いたことを教えてくれた。10以上咲いたから10だけ色をぬって、数は15と書いたことも教えてくれた。今日も13くらい咲いているということであった。①

ラジオ体操が終って朝顔の数を調べることになった。母親とM児、そして筆者の3人で、アサガオの数を調べた。

M児は、鉢の周囲を回ることによって数えようとするが、同じ花を2度数えることがあった。2度、3度と試みたあと、下から順番に数えることにした。母親は、すでに数えた花を手で押えることによって、2度数えることのないように手助けした。その結果、23個も咲いていることが分かった。②

今日は30日。表には前日の日付け「7・29」と記入されている。さっそくM児は本日の日付を記入しようとする。

M「29の次は20」

母「20の次は21よ」

M「30！」

こんな調子で、29日の次は30日であることが分かった。③

母「なんぼあった？」

M「23！」

M児が、色を塗り始める。この日は、アサガオの数が23もあるので3行を使って塗ることになった。筆者が鉛筆で3行分の枠の下に括弧を書いておいた。④

M児は「1、2、3、4、……」と口に出しながら、色を塗っていった。

「11、12、13、……20」と2行目も塗った。

M「23個あったんよね。21、22、23！」

K「明日は、何日か知っとる？」

M「7月31日」

K「7月31日の次は？」

M「7月32日」

たしかに31の次は32である。

母親「こんどカレンダーを見てみようね」⑤

急にM児は「１０＋１０＋３！」と口走った。どうやら２３は、１０のかたまりが２つと、ばらの１が３つということが視覚的に分かったらしい。⑥

母親「芋で作られたんですね」
M「丸いのは、マジックのふた！」⑦
K「中の星みたいのを、おばちゃんが芋で作ったんよね」
母親「全部一緒かと思いました」

M児が「明日は、これが咲く」といって、こうもり傘を閉じたときの形のつぼみの数を数えはじめた。全部で５つあった。⑧

M児が「今からアサガオに水をやっちょこうか」と言って、ジョウロいっぱいにあふれるくらいの水をたっぷりとやった。⑨

水やりの途中、たずねてみた。
K「何でアサガオいうんか知っちょる？」
M「朝咲くから」という答えが返ってきた。⑩

---

上記の７月30日の記録は、アサガオをめぐる筆者とM児とのかかわりでいえば、第２回目である。この記録に添って、まずは、アサガオがM児に呼びかけた内容が、じつに多様であることを明らかにしたいのである。

①ラジオ体操に出かけるM児とヒロ君（小５の兄）は、「おはよう」という挨拶をしてくれた。アサガオの表を作成してからは、M児の「アサガオが○個咲いた！」という言葉か、筆者の「今日は何個咲いた？」という言葉が、挨拶の代わりの役目を果たすようになった。何日も顔を合わすことができない時、夕方遅い時などには、電話で花の数を尋ねることもあった。アサガオという植物（物）が、M児と筆者の間を仲立ちする「媒介物」となったのである。これを子どもと教師の関係に当てはめれば、アサガオという教材を仲立ちとした間接教育の構造が明らかとなる。

この日も、M児はアサガオの花の数を教えてくれた。後で判明したことであるが、表を作った明くる日、つまり第２日目には15個のアサガオが咲いたのであった。この15という数字がM児を悩ませることになった。見本となったアサガオの表がそうであったということもあるが、表の作成の過程で筆者が「１行に１日分を記入する」という考え方を結果的に教えてしまっていたのである。だから「10以上咲いたから10だけ色をぬって、数は15と書いた」のであった。表１の第２行目(7/26)のように、M児は１行の中に10個分を塗った後、その上部に５個の小さな丸を描いて15個にしていたのであった。

M児を悩ませはしたが、結果的には、15が10よりも多い数であること、そして15が10の固まりとバラの５であることを印象づけたにちがいない。そのことは、⑥で述べるように、この日に咲いた23という数字の成り立ちへの発見へとつながる前段階の役割をも果たしている。毎日咲きかわるアサガオの花は「数」についてたくさんの事柄を呼びかけてくれるのである。

②第１日目のように花の数が４個であれば、数えることは簡単である。しかし、この日

のように１鉢に23個も咲くと、数えること自体が容易ではない。M児は鉢の周囲を回りながら数えるのだが、同じ花を２度数えたり、飛ばしたりして、正確には数えられないのであった。そこで、下から順番に、しかも母親が、すでに数えた花を手で押えて隠すという操作をすることによって23個も咲いていることが判明したのであった。順序よく並んでいない物を数えることは、大人であっても困難である。たくさんのアサガオの花は、下から順序よく、手で隠しながら数えるという方法をM児に教えてくれた。さらに紐や絵の具で目印をつけるなどの方法へと発展する可能性もはらんでいる。

③アサガオの花の数は毎日変化するのであるから、日付けに添って記入されなくてはならない。M児が「２９の次は２０」が言っているように、最初のうち２桁の順序数をまちがえることもあったが、咲いた花の総数を何度も数える経験を通して、数え方が上達していった。このほかにアサガオは、１位数のたし算の場面を何度も提供した。

④M児は、時に溜め息をついては23個ほど色を塗った。順序よく、はみ出さないようにと注意を集中しての作業は、M児にかなりの緊張を要求したようである。23個のアサガオは、M児に注意深く色を塗る場面も提供した。塗る作業を通して23という量も体験したのである。塗りながらおのずから発した溜め息がそれを物語っている。

⑤７月30日の次の日が「７月31日」であるのと同じように、M児の答えた「７月32日」は算数的には正しい。しかし生活レベルでは正しくない。母親は「こんどカレンダーを見てみようね」とだけ言って、いずれカレンダーを見ることを約束した。M児は、これを機にカレンダーとも対面することになった。毎日咲くアサガオの花は、M児にカレンダーへも目を向けることを要求したのである。

⑥M児が突然「１０＋１０＋３！」と口走った。23という数字が、単に２と３の集まりではなくて、実は10のかたまりが２つと、ばらの１が３つという構造を持っていることが視覚的に理解できたのである。アサガオという具体物を見て、表の中の丸という半具体物へと表現する活動が呼び起こした言葉が「１０＋１０＋３！」なのである。

⑦母親の「芋で作られたんですね」に対して、すぐにM児が「丸いのは、マジックのふた！」と応答した。表の中の１つ１つの図形の作り方を確実に記憶していたのであった。ということは、画用紙の縦横の長さを物差しで測り、印をつけ、線を引いて、必要な数の方眼を作り・・・といった表の作り方も記憶されているのである。いわば１枚の白紙から表が出来上がるまでの始終が記憶されているのである。そのことは、子どもの目の前で大人が複雑な作業をして見せることは、教育的に意味の大きいことが判明する。

⑧アサガオ調べの契機はM児の「アサガオが咲いとる！」であり、「４つじゃ」という言葉であった。ついで筆者が尋ねたのは「あした咲くぶん、どれか分かる」という蕾についての問いであった。そのときM児は理解できなかったので、筆者が「これよ」と言って教えた。ところが４日後には、M児みずからが「明日は、これが咲く」といって、こうもり傘を閉じて巻きつけた形のつぼみを数えはじめたのであった。

M児の予想では５つあったのだが、翌日実際に咲いたのは７つであった。アサガオの数は前日にはおおよその予想がつくのである。アサガオの蕾は、明日へのアサガオ観察へと子どもを誘ってくれる。

⑨３人でアサガオをめぐって様々な話をしてきた。話が途切れ、そろそろ「さよなら」をしてもよいと思われた時、M児が「今からアサガオに水をやっちょこうか」と言う。母親も「そうしたら？」と勧める。M児はすぐに裏庭の洗い場の水道から水を汲んできて、

ジョウロいっぱいの水をたっぷりとかけたのであった。母親や筆者が水遣りをしなさいと言ったわけではない。しかし、アサガオという「物」は、子どもに呼びかけて、自主的な水遣りを誘発するのである。

⑩M児がアサガオに水遣りをしている途中で、筆者は「何でアサガオいうんか知っちょる？」と尋ねてみた。M児からは「朝咲くから」という名答が返ってきた。確かにそうなのである。アサガオという名前は文字通りの「朝顔」であり、朝咲くことから名づけられた名前なのである。具体的な「物」をめぐって子どもとつき合うとき、必ずその「物」をめぐる言葉をやり取りすることになる。そのうえアサガオは一夏のうちに多様な変化を遂げる。だからアサガオに関する言葉も多様である。

アサガオという名称だけではなくて、アサガオに関わるそのほかの言葉としては、次のものがあった。

- 咲く、しぼむ、枯れる、
- 葉っぱ、茎、つぼみ、花、種、実、根っこ、花粉、
- 植木鉢、水やり、じょうろ、
- 葉の緑、花の青色・紫色、茶色、白、水色、ピンク、
- 自由研究、新記録、どべ、観察、カレンダー、

以上が第２回目につき合うことになった、アサガオをめぐるM児の活動の記録である。

たった１本のアサガオという植物が、周囲の大人や教師が言葉を尽くして語るよりも、さらに多くのことを呼びかけてくれている様子が明らかとなった。

７月26日に始まったM児のアサガオ観察は、その日から８月31日までの37日間、１日も欠かさずに続けられた。そして、以下に示すような表が出来上がったのであった。

夏休み最終日の８月31日には、筆者と共に「あさがおのはなのかず」の表を見ながらまとめをすることになった。

まとめをしながら、次のような項目がM児自身の手によって文字化されるにいたった。表１中の中央部の手書きの部分である。

**表１「あさがおのはなのかず」**

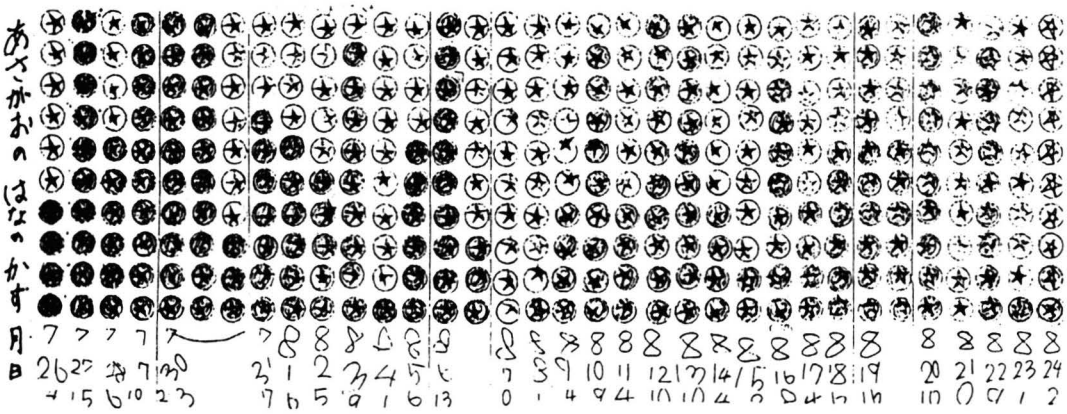

表１中の右部分の、M児による手書きの「まとめ」の部分を収録すると、次のとおりである。

①ぜんぶで２３５こさいた。
②かぞえるのがたいへんだった。
③しんきろくは、２３こでした。
④どべは、０こでした。
⑤１０こいじょうさいたのは、３かいでした。
⑥１にちもやすまずにかんさつをしました。
⑦みずやりは、たいへんでした。
⑧さいたひは、あおいろで、
　つぎのひは、むらさきいろになる。
⑨かみにかいたらおなじいろになる。
⑩たねができていた。
⑪まだあさがおは、さきます。

本論は、「栽培活動をめぐる間接教育」の構造を、具体物としてのアサガオという植物が「M児に呼びかけたこと」を事例として明らかにするという目的を持っている。アサガオという「物」が実際にどのような呼びかけをしたのかについては、37日間のM児とアサガオのかかわりの中の場面ごとに現れているのであるが、７月３０日の事例でもわかるように、あまりに多様である。本論では、夏休み最終日の８月31日に、M児のまとめとして列挙されることになった11の項目に沿いながら論を進める。

M児の手になるまとめが出来上がったあと、さらにM児の母親によって写真と説明の部分が貼り足されて、９月１日には表１が、M児の言う「自由研究」として学校へ提出されたのであった。

## 3．アサガオが呼びかけたこと

①ぜんぶで２３５こさいた

アサガオは早朝に花を開き、その日のうちにしぼむ。山口地方では、ちょうど子どもたちの夏休みに合わせたように咲きはじめ、夏休みが終わるまで、毎日のように花が開く。アサガオが子どもたちに呼びかけつづけるのは、何はともあれ「花」に関することがらである。

アサガオの表を作成した日、つまり花の個数調べの第１日目には４個のアサガオが咲いた。それも青色の２個と紫色の２個であった。M児は、青と紫の色を塗りながらも、花の数を意識せずにはいられない。

さらに表は、縦に10個が記入できるように作られている。４個のアサガオの形に色を塗れば、あと６個で10になることを意識せずにはいられない。表に個数を数字で記入するという行為は、数への意識を育てずにはおかない。もちろん「７月２６日」という日付けにかかわる数への意識も呼び起こす。

■記録２

７月31日（日曜）朝９時38分、筆者、M児宅に電話をする。父親が電話に出られる。

K「もしもし、Kのおじちゃんですよ、おはよう」

M「Kのおじちゃん、おはよう！」

K「M君、アサガオは咲いとる？」

M「咲いとる、７個。いま、勉強しよる」

K「そしたら、あとでね」

M「いますぐでも、いいよ」

M児と筆者は、すぐにアサガオの前で落ち合うことになる。

M「７」（M児、筆者に花の個数を教えてくれる。）

M「あしたのぶん、どいつかな。たぶん、これと思うよ」

母親「あした、何日じゃった？」

M「８月１日。学校へ行く日」（翌日は夏休みの登校日とのことである。）

K「７月は何日まで？」

M「７月31日」

K「あした11咲いたら、どうなる？」

M「ここ全部塗って、ひとつ」

（１列がアサガオ10個分であることが、はっきりと認識されている。）

---

朝９時38分に電話をした時、すでにM児はアサガオの数調べを終えている。さらに、「あしたのぶん」も簡単に見分けられるようになっている。

カレンダーについても、母親の「あした、何日じゃった？」という問いかけに対して、M児は即座に「８月１日。学校へ行く日」と答えた。筆者の「７月は何日まで？」の問いにも、M児は「７月31日」と答えた。

さらに筆者の「あした11咲いたら、どうなる？」に対しては、「ここ（表の１列分）全部塗って、ひとつ」と教えてくれた。表の１列がアサガオ10個分に相当し、11は10のかた

まり１つとバラ１であることがはっきりと認識されているのである。

数の操作に関しては、たし算や数の合成ばかりではない。比較や引き算の操作へと結びつく事例もある。次の事例は、７月31日に咲いた「７」と、８月１日に咲いた「６」を比較したものである。

■記録３

８月２日20時20分、筆者が郵便ポストへの投函から帰ったところで、M児が車のそばまで寄ってくる。

M「金魚、もらった」（と教えてくれた。）

M児宅に行って、金魚の様子をみる。

母親「今朝、きのうより１個少なかったと、Mが教えてくれました。明日は、たくさん咲くそうです」

筆者が見ると、つぼみが膨れているものがたくさんある。

---

次のような数の操作に関する事例もある。

■記録４

８月３日（水曜）９時。インターホンを鳴らして、筆者がM児宅へ。

K「アサガオ、見にきたよ」

M児、奥から出てきて「金魚、動かん」と教えてくれる。

M「ちょっと待って。（奥からアサガオの表を持ってくる）

青が１、２、３、・・・９。青が９個」

M児、花の数の９個ほど色を塗る。

K「９は、あと何個咲いたら１０になるかね？」

M「１個。５は、あと５」

これまでに咲いた花の数を数えることになる。

K、１、２、３、４、５・・・と、指で押えながら数えはじめると、Mが声を出して、１ずつ加えながら数えはじめる。

８５であった。（８月３日の欄に小さく「８５」と書いておく。）

M「桑原のお兄ちゃんよりも勝つかもしれん。……こんなに咲いたんだから」

---

M児が花の数の９個ほど色を塗ったところで、筆者は「９は、あと何個咲いたら10になるかね？」と尋ねてみた。M児は即座に「１個」と答えた。その後「５は、あと５」ともつけ加えた。アサガオの数調べは、10の分解と合成の活動を、おのずと誘発していることが明らかとなる。

この後、調べ始めてから９日の間に咲いた数の総計を数えることになった。M児は、花の形をひとつずつ指で押さえながら数えていく。29から30へと十の位が変わるとき、数えるスピードが落ちた。39から40へのときも、49から50のときも同様であった。しかし、どうにか当日分も含めて85個まで数えることができた。

自分で色を塗った形を、これまた自分の指の動きと声を連動させて、１個ずつ辿りながら数える機会は、子どもの生活の中にはめったにない。アサガオの数調べは、どの子どもにも、数の呼名を、そして一対一対応の累加計算へと誘ってくれる。

数えた結果の「85」を、表の中に小さく書き込んでおいた。

その後M児は「Kのお兄ちゃんよりも勝つかもしれん」と口走った。ちなみに、アサガオの表づくりの手本となった筆者の長男のアサガオの総計は113 個である。M児の85は、113 の75.2%に相当する。数の大小を直観的にとらえたときの言葉であろう。M児の意識の中に、個数の多少の直観と、これなら勝つかもしれないという予感があったことがうかがわれる。結果的にもM児のアサガオは、およそ２倍の235 個も咲くのである。

夏休み最終日の午前中、まとめの作業の最初に、全部の個数を数えることになった。途中の８月16日にも数えて「157個」まではわかっていたので、当日は158 から数え始めることになった。総計の235 まで数えることは、小学校１年生にとっては大変な作業であった。数え終ったあと、「ぜんぶで２３５こさいた」と、まとめの第１項目を書いた。夏休みの間、子どもたちは字を書く機会が少なくなっている。ときどき字を思い出しながらのまとめとなった。しかしながら、後半になると鉛筆の握り方も、字の形も、書くスピードも出てきたのである。

■記録５

８月31日、まとめの様子。

M「２３４。書くのは簡単ね。（二百三十四と）読むのは、たいへん」

（まとめの作業の途中で休憩をした。その時に数え直してみると、１個ほど見落としていたことが判明した。正しくは235 個である。）

K「ほかに、ないかなあ」

M「『アサガオを数えるのが大変だった』とか？」

K「うん、それを書こうや」

---

アサガオの数を１個ずつ数えることは、やはり子どもにとっては大変な作業である。だからこそ、まとめの第２項目目には、M児が発した次の言葉を、そのまま残すことになった。

| ②かぞえるのがたいへんだった |
|---|

| ③しんきろくは、２３こでした |
|---|

まとめの作業は、子どもから見れば「書くことを捜すこと」である。M児に対して「ほかに書くことはないかなあ」と促すのだが、なかなか見つからない。

そこで筆者は、記入欄のすぐ隣の６行、つまり８月26日から31日までの６日間を両手の人差し指ではさんで、この部分の最多の数の発見を期待して、ひとつの発問を投げかけた。そのあとであれば、37日間の最多の数を見つけるという発想につながると考えたのである。

■記録６

K「（夏休みの終わりの６日間を両手の人差し指ではさんで）この中で新記録は何個？」

M「８。そしたら、全部の新記録は２３」（M児は覚えている様子である。）

M「新記録は２３でした」（書き言葉の言い方でいう）
（M児、書き始める。「しんきろくわ」と書いたので）
K「”わ”は、くっつきの”は”（と言って消しゴムで消す。）
M児、「わ」を「は」に書き直して、それ以下の文を書く。

---

アサガオの最多の数を表すのに、筆者は「新記録」という言葉を使ってみた。子どもに理解しやすい表現であると考えたからである。するとM児は表の中の８月31日の「８個」を捜し出して「８」と答えた。その上、驚いたことに「そしたら、全部の新記録は２３」と即座に続けたのであった。M児は30日前の数字をはっきりと記憶していたのであった。自分が世話をして咲かせたアサガオの花の新記録は、M児の中で生き続けていたのであった。おそらく総数の235 と共に生涯忘れることのできない刻印されたとも言うべき数字なのである。

さらに驚いたことがある。M児は、「新記録は２３でした」と、そのまま文字化すればよい「書き言葉」の言い方で発言したのであった。

さっそくM児が書き始める。「しんきろくわ」と書いたので、筆者は「”わ” は、くっつきの ”は”」と注意して消しゴムで消す。M児は、すぐに「わ」を「は」に書き直して、それ以下の文を書いたのであった。

| ④どべは、０こでした |
|---|

夏休み終わりの１年生の多くの児童にとって、発見した内容を言葉で「言うこと」は容易であるが、文字の形で「書くこと」は困難な作業である。M児がまとめの仕事に立ち向かうということは、書く内容を発見することと、発見した内容を文字表現するという二重の課題に向かっているのである。

■記録７

K「新記録の反対は？」
M「どべ！」
K「うん、そしたら？」
M「どべは、０こでした」
（M児、書き始める。しかし「どべ」の「べ」が思い出せない様子である。）
K「”べ” は ”へ” に点々」（と言って「べ」を教える。）

---

咲いた数の最多数を「新記録」という言葉で表現した筆者は、最小数については「最低記録」くらいの言葉を予想した。しかし、M児は「どべ！」と、すばらしい言葉を即座に思いついた。たしかにこの近辺の子どもの日常の中で使われている生活の匂いの滲んだ最下位表現が「どべ」なのである。M児は、勢いよく鉛筆を運んだ。

この「どべは０個でした」には、深い意味が隠されている。

表の中には０個の日が２回ある。８月７日と８月21日である。もちろん表の中の丸に色はついていない。これには、子どもなりの「０の概念」の理解が込められているのである。この場合の「０」とは、数え忘れた「０」でも、塗り忘れた「０」でもなくて、数えようとしても開花した花が見当たらなかったという意味の「０」なのである。

筆者の「ほかにないかなあ」に促されて、M児が「オニヤンマを捕まえた」と言った。M児のいうとおり、この夏には、これまで捕獲しようとしてもできなかったオニヤンマを数度にわたって取ることができた。筆者が捕獲したオニヤンマを網から取り出したり、居合わせた小さな子どもに見せたり、触らせたり、図鑑で調べたりするのはM児の仕事であった。その折にM児は、何度か自分の手でつかんで、オニヤンマの大きさと力強さを実感することができたのであった。しかし、目前の仕事は「アサガオの数調べのまとめ」である。筆者は「そうよねえ、大きかったねえ。けど、アサガオと関係ないからなあ」と対応した。

⑤１０こいじょうさいたのは、３かいでした

オニヤンマの話題が一段落したあと、次のような会話がつづいた。

■記録８

K「そうねえ、この１列は、何個あるの？」
M「１０個以上」
K「『以上』というのは、何？」
M「『うえ』。」
K「そしたら、１０個以上咲いたのを数えてみようや」
（筆者が、２列以上にわたっている部分の両側に線を引く。
３回目にはM児が物差を使って線を引く。）
M「１０個以上咲いたのは３回でした」（書き言葉の言い方で言う。）

---

表を見ると、２列以上にわたっている日が３回ある。７月30日(23)、８月６日(13)、８月19日(19)の３回である。大人の私もそう思っていたのであるが、二人とも７月27日の15個を忘れていたのであった。というのは、その日は１列分を塗ったあと、その上部に５個ほど小さく書き加えておいたからであった。１日に10以上咲いたのは、正しくは４回である。（いずれM児と共に確かめた上で、訂正したいと考えている。）

⑥１にちもやすまずにかんさつをしました

■記録９

K「（表の初めから終わりまで何日あるか、つまり何回ほど記入しているかを意識をさせるために）はじめから何回書いているか、数えてみようや」
（二人で数えようとするが、M児は終わりまでは数えることができない。しかし、この作業を通して、１日も欠かさずに記入していることが分かった。）
K「『一日も休まないで観察しました』。」

---

１日も休まずに観察できたことは、M児にとって嬉しいこと、誇りうることとして感じ

取られているようである。その証拠に２学期始業式の朝、嬉しそうに学校へ持参した。

それにはいくつかの好条件が重なった。

第１に挙げなくてはならないのは、アサガオの鉢の置かれた場所が良かったことである。M児のアサガオは、玄関のドアの前に置かれた。ドアを開けた人が、必ずぶつかる場所である。M児は、毎日何回も出入りする玄関で、アサガオと「ぶつかる」ことなしにはいられないのである。ぶつかるとは「激しく出会うこと」にほかならない。母親の子育ての知恵であると賞賛せずにはいられない。アサガオがM児とぶつかるところにあったからこそ、多くの事柄を呼びかけたのである。

第２に、周囲の大人や兄弟が、このアサガオに関心を寄せたことである。この夏、祖父宅の改造のために、M児は祖父母と一緒に暮らすことになった。M児の祖父は盆栽にも造詣が深く、アサガオへの目配りも丁寧にされた。ついでに隣人の筆者も、表づくりや挨拶代わりの「アサガオ何個咲いた？」という言葉を通して貢献しているはずである。

### ⑦みずやりは、たいへんでした

筆者が「ほかにないかなあ」とつぶやくと、M児は「水やりは大変でした」と言った。この夏は気温も高く、水不足でもあったが、アサガオの世話をしたM児にとって水遣りは大変な仕事であった。

もうひとつ「大変でした」とM児が感じるエピソードがある。

■記録１０

８月12日（金曜）10時18分、M児、自分の額に値段シールを貼って喜んでいる。そのシールには､190円と書いてある。

K「こりゃあ安いから、買って帰ろうかねえ」

玄関先のアサガオを数える。M「１、２、３、４、５、６、７、８、９、１０」

この後、同じクラスのMさんのアサガオを見に行くことにする。

Mさんの家に着くなり、M児はアサガオの花を数えて「３個ある！」と大声で言う。

ピンポーンとインターホンを鳴らすが、不在の様子である。

M児と一緒に、風で倒れているアサガオを起こす。

M「お前という奴は」

帰りに、M「これで２回目」

８月13日（土曜）11時、筆者がM児宅に電話する。声が聞こえてきたので。

K「M君？」

M「おじちゃん、何？」

K「アサガオ、何個咲いた？」

M「１０。きのうと同じ。きのうの予想と同じ、１０じゃったよ。

（Mさんのアサガオの）水やりは、どうするん？」

K「おじちゃんが、（じょうろを）抱えてかけて行っちゃろう」

M「おじちゃん、きょう、いつMさんちに行く？」

K「今から行こうか」

M児宅の裏庭にある蛇口から、じょうろに水を入れて、筆者が持つ。
Mさんのアサガオは5個ほど咲いていた。水をやる。葉がしなびはじめている。水やりとしては、ちょうどいいタイミングであった。

---

M児が「みずやりは、たいへんでした」と書いた裏には、同じクラスのMさんのアサガオに水遣りに行ったという事実が隠されたいるのである。Mさん宅では、アサガオの花の数を書いたメモをドアにはさんで置くことにした。

まとめの作業も長い時間が続き、M児が疲れた様子なので、筆者は「休憩しようや」と提案した。M児は「7、書いた」と、すでに7項目ほど書いたことを教えてくれた。
そう言ってM児は、各項目の左端に書いていた「○」を消しゴムで消しはじめたのであった。そこで、筆者はきれいに消すのを手伝った。
M「丸（○）を消す。この中に、1とか、2とか、書く。先生たちが、よく分かる」
そう言いながら○を書いた後で、その中に1を書き入れる。同じように丸を書いては、2・3・4・5・6・7と数字を書き入れていったのであった。こうして上から順に①から⑦までの丸付き文字が並ぶことになった。この結果、「まとめ」の項目がいくつあるか、あるいは何番目であるかが、分かりやすくなった。これは、M児の発見した表現上の工夫である。

■記録１１

休憩のためにM児宅の玄関の前に置いてあるアサガオの鉢の近くで深呼吸をする。その後、アサガオの花を数えてみる。朝のうちに数えたときに8個であったが、よく見ると「小さな花」が、大きな花にくっつくように咲いているのを見付ける。M児は、すぐに家の中に入っていって8月３１日の欄の9個目の色を塗った。
M児は「ここも、ここも、直した」と教えてくれる。すなわち、9個目の色を塗ったこと。「8」の数字を「9」に訂正したことを指している。しかし、全部の花の個数は「２３４」のままで、まだ直していない。
K「全部の数は？」
M「ああ、２３５」（M児は、すぐに気付いて言う。）
そのあと、Kは、アサガオが咲いた日数を尋ねるつもりで、
K「咲いた日は？」（と尋ねる）。
M「咲いた日は青で、次の日は紫になる」（と書き言葉の調子で言う。その後すぐに）「だけど、紙に書くと同じ色です」

---

このようにして、第⑨番目の項目が生まれたのである。

| |
|---|
| ⑧さいたひは、あおいろで、<br>つぎのひは、むらさきいろになる |

はじめてアサガオの色を注意してみるようになった7月26日には、青色と紫の花が、そ

れぞれ２輪ずつ咲いていた。色も青と紫に塗り分けたのであった。ところが、その後、毎日のように咲くアサガオの花の色は区別がつかなくなり、表の中では青色で塗られてきたのであった。

１日目に青色であったアサガオの花は、そのまま置いておくと２日目には紫色に変色する。これは普通に見られる花の色の変化である。

この気付きも、M児は、あたかも文章の言葉のように発音した。

### ⑨かみにかいたらおなじいろになる

８月16日の昼過ぎ、それまでに記録したアサガオの花の数(157) を数えたあと、M児はアサガオの花の汁で字を書くことになった。

その契機となったのは、M児が花の数を数えている間に遊びにやって来たK児（当時２歳６か月の男児）に、筆者がアサガオの花を強く押しつけて幅１cm長さ10cmばかりの波形の線を引いたことにある。K児は、３か月前の５月にM児の隣の家に引っ越してきて、時に一緒に遊ぶこともある元気のよい男児である。そのK児に対して、筆者が「M君のアサガオの花、ひとつだけもらおうね。きのう咲いたぶんなら、いいじゃろう」と言って花を摘み取り、持っていたＢ５の白紙に押しつけて紫の線を描いたのであった。

「Kちゃんもやってごらん」と言って、花を押しつぶした塊を手渡すと、K児は細く薄い紫の線を６、７本引いた。

その様子を見ていたM児は「ぼくもやろう」と言って、花をとり、白紙の裏側に線を引き始めた。Ｂ５の白紙を横にして、白紙の４分の１の空間をつかって紫色の太い線を何本も引いた。ひとしきり線を引いたあと、今度は下の余白に自分の名前を太く平仮名で書き始めた。

「鉛筆なら、もっとうまく書ける」と言いながらも、２回目の名前を書こうとしたのである。最初の１輪をつかって線を引き、自分の名前の最後の「き」あたりでは、かすれ始めた。紫色が薄くなり、力を入れても書けなくなったのである。

ここで予想もしなかったことが起きたのである。

■記録１２

M児は、もう１枚の紙に書こうとする。こんどは、この日に咲いた青色のアサガオの花をつかって、同じように自分の名前を書く。

ところが、ここで大変なことが起きたのである。それというのも、青色のアサガオの花で書いたのに、紙には紫色の字が書けたのである。

M児は「青色で書いたのに紫になった！　同じ色になった！」と叫んだ。

これには、M児ばかりではなく、居合せた母親も私も驚いた。

１３時５８分、バイバイ。

---

１日目に青色であったアサガオの花は、そのまま置いておくと２日目には紫色に変色する。これは色素の化学的変化である。24時間をかけて自然に変化するものが、人為的に押しつぶされて紙の上に描かれることにより、急激に化学的変化を引き起こしたものであると考えられる。

小学校１年生の子どもの理解の上では「青色で書いたのに紫になった。同じ色になった」という気付きに過ぎないが、紛れもなく化学的変化の現象を「発見」したことになる。この日から15日後の８月31日の「まとめ」の中で、この現象はM児自身によって、もう一度想起されたのである。

■記録１３

M「ぼく、もうひとつ見つけた。『種ができる』。
　（その後、前に考えていた）『書いたら同じ色になる』」
（M児、「書いたら」の「ら」が難しい様子なので、Kは「ら」を薄く書いてやる）
M「『紙に』と書こうか、分かりやすいから」

---

⑨項目目の「かみにかいたらおなじいろになる」は、このようなプロセスを経て生まれたのであった。

つづいてM児の言った「種ができていた」も書くことになった。

| |
|---|
| ⑩たねができていた。 |

９時15分にはじめたM児とのまとめは１時間を越えた。⑩番目の「たねができていた」を書くと、M児は「⑩番までいい」と言う。かなり疲れた様子である。それでもM児は「⑪、最後、見つけようか」と言う。これには訳がある。

まとめを10項目ほど書いたあとも、もう１行ほど書ける紙の余白が残っていたのである。いわば紙の余白が、M児にもう１項目ほど見つけたいと誘うのであった。

■記録１４

アサガオの表は、７月26日から記入しはじめて、いちおうの区切りである８月31日に終わっている。だから、筆者としては記入した日数の合計に気付かせようとしたのであった。M児と一緒に初めから数えて３７日、さらに８月の３１日と７月の６日分を合わせて３７日という数字を出した。

K「３７日、観察しました」
M「あんまり意味がわからん」
K「そしたら、ほかのことを考えようや」
　（そのあと、ふたりで手を後ろについて、考えを巡らす。）
M「雨が水をやってくれて、親切でした」
　「まだ、咲きます」

---

夏休みの最終日の８月31日で、いちおうのまとめはしたものの、アサガオはまだまだ咲きつづく。こうして、次のような項目が出来上がったのであった。

| |
|---|
| ⑪まだあさがおは、さきます。 |

以上で、まとめの仕事は終わった。すぐに写真を撮ることにした。さっそく、出来上が

った表を広げ、アサガオのそばで記念写真を撮る。

このあとM児に、筆者の長男の「アサガオ調べ」の表を見せる。表の下には「１１３」という数字が書かれている。M児は「ぼくのが多い！」と喜んだ。帰って行くとき、M児が「ああ、仕事をした！」と言った。そして「仕事をしたあとは、ご飯がおいしい！」という声も聞き取れた。こうして１時間３０分ばかりのまとめの仕事が終わった。

## ４．アサガオをめぐるその他の活動

ａ．記入欄が活動を誘発する

８月25日、M児は２枚目の記入用紙の中の記入欄が無くなることに気づいた。

■記録１５

８月25日（木）11時15分ごろ筆者が帰宅すると、M児が車のそばまで駆け寄ってくる。アサガオの数調べの表の２枚目の記入欄が足りないというのである。手にはクーピーを持ち、脇には用紙をはさんでいる。

M「おじちゃん、書くところ、満タンになった」

K「そりゃあ困ったねえ」

M「きのうが２、きょうが４」（アサガオの花の数を教えてくれる）

K「見せてごらん」（表を見ると、あと２行しか残っていない。それも昨日分と今日とで使い終わることになる。）

M「Mさん、花を見にきて、ドアにはさんどったから、（花の数が）分かったって、何個咲いたか」

（M児は、盆休みのときのMさんのアサガオの数をメモしたことを言っている。）

M児が、すぐにも作りたい様子なので、さっそく玄関の板の間で記入欄を作ることにする。

M「満杯になって」

K「いつ、なったか？」

M「おととい」

K「今日は何日かな。いつまで大丈夫かな」

M「２４と２５日は大丈夫」

筆者、これまでと同じように、鉛筆で記入欄をつくる。

M「ここは貼るところ」（３枚目の用紙を貼りたす部分を残しておく）

M「最後は、書けんようになるよ」

M「１０以上は咲いてほしくない」

筆者、マジックのキャップを利用してスタンプを押す。しかし、円の中の星形のスタンプは、ジャガイモで作っていたので、もうなくなっている。このたびは、手書きの星を書き入れることにした。M児は、そばでKの作業を見ている。

---

M児が帰宅した筆者をつかまえて「おじちゃん、書くところ、満タンになった」と言う。この言葉がきっかけとなって、新たに記入欄を作成することになった。

１日ごとに少なくなっていく記入欄を見ながらM児は「最後は、書けんようになる」、「１０以上は咲いてほしくない」と心を砕いたにちがいない。そして筆者の帰りを待ち構えていたのであった。いわば１日ごとに無くなっていく記入欄がM児の活動を誘発したの

である。

そこで筆者は、M児の目の前で、これまでと同じようにマジックインクのキャップとジャガイモのスタンプを使おうとするが、ジャガイモはすでに無くなっている。仕方なく手書きの星を書き入れることにした。M児は、そばで作業を見ていたのである。

b．アサガオをめぐる人たち

8月初旬、M児と同じクラスのMさんの父親に出会ったので、数調べのための表を作成することを勧めた。Mさん宅では、アサガオ調べの表のためのゴム印が父親の手で作られることになった。

盆休みにMさんのアサガオに水をやり、数を数えてあげたことをきっかけに、Mさん一家ともつき合いが始まった。そして、記入用紙が「満タン」になり、ジャガイモのスタンプが無くなっていたこともあって、Mさんのスタンプを借りることになった。Mさんの、女児ばかりの4姉妹にもお母さんにも出会うことになった。このようにアサガオは、M児とMさんの家族と出会うきっかけをももたらしたのであった。

9月18日、それまでに咲いたアサガオの総計を出した。夏休み中に235、それに9月に入って18日までに54個咲いたので、総計は289 個となった。そこへ「にわとりの家のおばさん」が通りかかって、立ち止まった。

■記録１６

K「いくつ咲いたか、おばちゃんに教えてあげて」
M「２８９」
おばさん「３００も咲いたかね」（とびっくりされる。）
おばさん「もう咲くまあ（咲かないでしょう）」
母親「まだ咲くようですよ」
K「さっきM君が数えたら、もう5つは咲くそうです。
　M、どれが咲くか、おばちゃんに教えてあげてよ」
M「これ」（指さす）

いつもの散歩では「にわとりの家」まで足を伸ばすことが多い。そのおばさんがアサガオを数えているときに通られたのである。289 という数字を聞いたおばさんはびっくりされた。これまでは鶏をめぐってつき合ってきたおばさんと、今度はアサガオをめぐって話をすることができたのである。アサガオという「物」は、偶然に通りがかった大人をも結びつける力を秘めているのである。

c．アサガオの色をめぐって

■記録１７

8月4日、11時30分ごろ、M児が玄関の前にいる。

M児がアサガオの花の模様の色を教えてくれる。

M児は、いちばん外側の縁にあるのが「白」、大部分が「水色」、中央に近いところが「青」と教えてくれる。

M、アサガオの花を摘んで、Kに「紙、ちょうだい」と言う。K、持っていた白い封筒

をMにわたす。M、花びらを押し付けて、花の色を塗る。紫色になる。

---

アサガオの花は最初のうち、青色と紫色の２種類が咲いていたが、すぐに区別がつかなくなり、青色の花だけになった。

次に、１日目は青色であるが、２日目になると紫色に変化することもわかった。

また、１日目に咲いた青色の花でも、２日目の紫色でも、紙に書くと同じ色（紫）になることも発見した。

色についてはM児が、もうひとつのことを教えてくれた。それは１輪のアサガオをよく見ると、３つの色があるというのである。記録にもあるように、青色のアサガオの外縁の端は白であり、大部分が水色であり、中央の漏斗に近いところが青なのであった。

ｄ．「自由研究」という言葉

M児の口から「自由研究」という言葉を聞いたのは８月19日のことであった。

■記録１８

８月19日（金曜）、夏休みの登校日。玄関を出るM児、家の奥に向かって叫んでいる。

M「お母さん、きょうアサガオ、15咲いとったけえ、おじいちゃんに、覚えてもらっとって」

この言葉を残して、マー君は学校へ。帰宅後、M児と話す。

K「今日、学校へ行った？」

M「ええとね、夏休みのお話、お話」

K「先生のお話を聞きに行ったの」

M「絵日記を持って行く日だったそ（「絵日記を持って行く日だった」の意）。
自由研究は、今度でいいの」

---

ここでM児の言っている「自由研究」とは、「アサガオの数調べ」を指している。登校日の先生の話の中で、２学期になってから「自由研究」を持っていく日のことが語られたのであろうか。この日をきっかけにM児の口から「自由研究」という言葉が出はじめたのである。

ｅ．しぼまないアサガオ

９月に入ってもM児のアサガオは咲き続けた。しかし中旬にもなると極端に数は減少していった。９月18日までのアサガオの数は、次のとおりである。

■記録１９

| | |
|---|---|
| ９月１日 | ●●●●●●●●●９ |
| ２日 | ●●●●●５ |
| ３日 | ●●●●●●●●●９ |
| ４日 | ●●●３ |
| ５日 | ●●●●●●●●●●●●１２ |
| ６日 | ●●●●●５ |
| ７日 | ０ |

| | |
|---|---|
| ８日 | ●●●●4 |
| ９日 | ●●●3 |
| １０日 | 0 |
| １１日 | 0 |
| １２日 | ●1 |
| １３日 | ●1 |
| １４日 | 0 |
| １５日 | ●1 |
| １６日 | 0 |
| １７日 | ● |
| １８日 | 0 |

９月18日９時35分、起床したばかりのM児が外に出てくる。

上記の表のように、９月中旬になると花の数も極端に減って、咲いても１個だけ咲くことが多かったのである。

K「ヒロ君が、（朝顔の）咲くぶんを見つけたよ」

（３人で朝顔の鉢のある玄関前に行く。）

M「本当じゃ。ここにもある」

K「ぜんぶで何個ある？」

M「１、２、３、４、５。あしたも咲くよ、これ。あさって」

（きのう咲いた朝顔が、まだ完全にしぼみきらないままに残っている。）

M「なんで、まだしぼまんのんかねえ。これだけ力が強い。

ちょっと、お母さん呼んで、見てもらおうか。ちょっと、呼んでくる」

（M児、家に入って母親を呼んでくる。）

M「お母さん、きのうのアサガオが、まだ咲いとる、ほら」

K「きのう夕方の４時までは、まだ開いていました（４時40分ごろ、しぼみ始めた。）

夕方、マー君が手で開いたら、開けたよねえ」

M「開いたら、花びらが破けた」

母「寒さでしょうかね」

M「そんなら、あした咲くぶんも、もつかね（「午後までもつかね」の意）」

---

９月に入って朝夕の気温が下がりはじめた。朝のうちに咲いた花が、午後になってもしぼまないことが多くなった。M児はこのことに気づいて「なんで、まだしぼまんのんかねえ。これだけ力が強い」と表現した。

さらに「そんなら、あした咲くぶんも、もつかね」と予想もした。

花が終わったあとも、種がたくさんのことをM児に呼びかけた。もちろん、花の咲く前の新芽が、双葉が、葉や茎が、たくさんのことを呼びかけたにちがいない。本論は、花がM児に呼びかけの部分だけで終えることにする。

## 5．まとめ

a．アサガオの多様な呼びかけ

種まきと発芽、双葉から本葉へ、つるの成長、毎日咲きかわる花の数、時間とともに変化する花の色、花を使った遊びの数々、植木鉢への水遣り、実から種への変化など、たった1本のアサガオが子どもたちに呼びかけてくれる内容は多岐にわたる。

本論でも明らかとなったように、アサガオはM児にたくさんの事柄を呼びかけた。それは、親や教師が言葉を尽くしても語りきれないほどの豊かで深い内容をもっていることが明らかとなった。

教材としてアサガオを導入する時、それは教師の思いや意図をアサガオに託しているのだといってよい。教育者の意図はアサガオという物の背後に隠れて、間接的に働きかけるのである。子どもの目の前にあって、直接的に子どもに呼びかけるのはアサガオなのである。このアサガオという物がもっている教育力の間接的構造を具体的に示すことが本論のねらいであった。

b．学習の場づくりの大切さ

幼児あるいは小学校低学年の子どもにとって、数十日にわたる継続的な観察学習を成立させることは難しい。しかしながら、周囲の大人が関心をもち、問いかけること、つまり「人」を媒介とした間接教育と、じょうろや記入用紙を準備すること、つまり「物」を媒介とした間接教育とによって、それは可能となる。

そして何よりも大事なことは、子どもと観察対象（アサガオ）とが出会わざるを得ないような場所に置かれることである。もっと言えば、子どもと対象物が「ぶつかる」場所に置くことが、観察学習を継続させるコツである。学校においても家庭においても、対象物の置き場所を考慮することが第1である。

c．現場学習ならではの学習内容と学習方法

アサガオ観察の第1日目には、青色と紫色の2種類の花が2個ずつ咲いた。どの色を塗ればよいのかを確かめるために、実際に花を見に行ったのである。色を塗るという行為をする時にはじめて、どの色鉛筆を選ぶかという切実な場面に追い込まれたのである。それまでは、ぼんやりと見ていたことになる。これは現場での体験学習ならではの切実な学習である。

同じように、数十、数百の物（アサガオの花や種）を数える場面は、子どもの集中力や持続力を要求する。これこそ「物」の呼びかける学習内容であり、具体的な「物」ならではの学習方法である。

d．1枚の表が呼びかけたこと

アサガオという「物」が呼びかけてくれた。同じようにアサガオ観察のために準備した1枚の「表」も重要なことを呼びかけている。まずは、アサガオの個数や、数の合成と分解、数の多少などを呼びかけた点に着目しなくてはならない。

もうひとつ、M児とアサガオのかかわりのうち「書くところ、満タンになった」という表現が示唆してくれることがある。教材としての表は、夏休みの40日分が準備されていなくてはならないということではないのである。子どもにとって「表が無くなる」という心配が生まれ、何らかの行動が引き起こされることに教育的意味が存在する場合もあるということである。それは、表が子どもに呼びかけてくれることであり、物のもつ内容的必然

性が子どもに語りかけてくれるということなのである。

e．挨拶の内容としてのアサガオ

アサガオをめぐる言葉が挨拶の役割をすることも明らかとなった。とりわけ家庭や小規模校においては、大人の思いをアサガオという物の背後に隠すという配慮とともに、子どもとの出会いを媒介するメディアとしてのアサガオを重要視したい。

常に同じ大人と同じ子どもとが生活する中で、1日ごとに生長変化していくアサガオという植物は、たくさんのことを呼びかけてくれるとともに、教師と子どもをつなぐ役割をする。夏休みの家庭を訪問をして教師が「アサガオは何個咲いたかね」と尋ね、子どもからは「今日は○個咲いたよ」が挨拶代わりに交わされるようなアサガオの役割を期待したいのである。

f．教師に対する子どもの思い

8月31のまとめの途中で、M児は突然それまでの丸（○）を消して、丸付き文字に書き直した。その方が「先生たちが、よくわかる」からであった。幼児や小学校低学年の子どもにとって「先生」という存在は大きく強い。その先生に分かりやすいようにと番号をつける子どもの思いを、教師は大事にしたい。子どもたちの何気ない作品のひとつの中に、ほんの僅かな違いの中に、子どもの思いを読み取らなければならない。とりわけ具体的な「物」の中には、子どもの思いが表現されやすいのだと考えなくてはならない。

g．教材としてのアサガオの見直しを

アサガオは奈良時代に薬として日本に移入されて以来、日本人の生活の身近に息づいてきた植物である。近代学校制度が成立してからは学校生活において子どもの身近にあったと思われる。戦後の理科教育においては教材としても子どもの近くにありつづけた。しかし近年になって生活科が新設されてからは、教育現場においてアサガオ栽培は重要視されなくなってきているように思えてならない。そのような時期にあたり、もういちどアサガオという植物（物）のもつ教育力が再認識されなくてはならない。

**付記**

このたびもM児の家族の皆さんにはお世話になった。記して感謝を申し上げたい。

現在、冊子『アサガオが呼びかけたこと』と題して記録集を準備中である。

**（注）**

（1）M児との散歩については、すでに以下のところで論述している。

拙論「幼児と自然環境との関わり――身近な散歩コースにおける3才児と自然との出会い――」山口大学教育学部論叢第41巻第3部、1992、255-272ﾍﾟｰｼﾞ。

拙論「幼児の散歩活動で育つ力――身近な散歩コースにおける3才児の実態から

—」山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第３号(1992.3)、133-144ﾍﾟｰｼﾞ。

拙論「マー君の散歩道」山陰中央新報、1992年（平成４年)7月14日より1993年（平成５年)2月９日までの計30回連載。

拙論「幼児の蝶の理解と名称の分化過程」山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第５号(1993.3)、233-253ﾍﾟｰｼﾞ。